

留学生も地域の一員

～防災訓練と地域行事で育む顔の見える関係～

川内町内会 会長 永幡 正博さん



防災訓練から始まる「顔の見える関係づくり」

川内町内会が留学生との交流を始めたきっかけは、東日本大震災後の避難体制づくりにありました。この地域は学生や留学生が多かったこともあり、避難所が遠く、避難が難しい人のために、留学生が住むマンションを一時避難場所として活用したのが始まりでした。学生や留学生も炊き出しの支援を必要としており、「顔の見える関係づくりが必要だ」と実感しました。

その後、企業で就労する外国人住民も増えてきたことから、外国人住民と何か一緒にできることはないかと考え、2013年から消防署や管理会社にも協力をもらい、防災訓練を本格的に実施しました。最初は45人ほどの参加でしたが、年々増え、今では町内住民と外国人合わせて80人以上が参加します。外国人住民が増えるなかで、「言葉が通じない」「ルールが分からない」といった不安を互いに減らすために、防災訓練が交流の第一歩となりました。

翻訳アプリの活用で言葉の壁もクリア

防災訓練では、消火器の使い方やAEDの操作、応急処置の仕方などを一緒に体験しています。言葉の壁は、やさしい日本語を使うようにしたり、翻訳アプリを活用して乗り越えています。防災訓練を初めて体験する外国人も多く、緊張しながらも楽しそうに取り組む姿が印象的でした。

また、訓練の後には、ゲーム大会などお楽しみ会を行っています。同じ行事の場を共有することで、留学生もリアルな日本語を学べ、自然に交流できる場が生まれていきました。

イベントでの多文化交流・深まる絆

イベントの案内は町内会で英語翻訳ができる住民と協力して英語版チラシを作成し配布。文化の違いを尊重しながら、誰もが参加しやすい工夫を続けています。七夕まつりでは住民が留学生の浴衣の着付けを手伝ったり、秋祭りや正月に餅つき大会を行ったりするなど年間を通じて多くのイベントを開催し、交流が定着してきています。参加は強制していませんが、イベントの楽しさを留学生同士が口コミで伝えてくれ、参加者数も増えています。

こうした積み重ねにより、「外国人がいるのが当たり前」という空気が町内に生まれ、こどもたちが自然と「ハロー」と声をかける姿をよく見かけるようになりました。

継続と声かけがつくる安全・安心なまち

町内会では、生活ルールや安全面でも工夫を凝らしています。地域特有のルールがわからないのは日本人も外国人も同じなので、わかるように説明することが大事。そこで、ごみ出しや自転車マナーの注意喚起を翻訳したチラシを作成しポスティングしたり、新しく入居した学生や留学生に向けて多言語版の説明書や仙台市指定のごみ袋を見本として配布したりしました。文化や価値観は違っても、同じ地域で暮らす仲間として寄り添い合うことが大事なのだと感じています。

他の町内会へのメッセージとしては、まずは声かけと継続が大事。そして、コミュニケーションが地域の安全・安心につながっていきます。外国人も地域住民も、互いに顔が見える環境を築く、それが、川内町内会の目指す“誰もが安心して暮らせるまち”の形です。

